

焼岳の火山活動解説資料（令和7年3月）

気象庁地震火山部
火山監視・警報センター

山頂付近の微小な地震が継続して発生しており、3日14時頃から9日にかけて地震回数が増加しました。GNSS連続観測では、山頂付近での緩やかな膨張を示すと考えられる変化が続いています。

焼岳では火山活動が高まっており、4日09時20分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）に引き上げました。想定火口域から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。噴火時には、風下側では火山灰だけでなく小さな噴石が風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

○ 活動概況

・地震の発生状況（図1-1②③、図1-2、図3、図7-④⑤、図11、図12）

山頂付近では、微小な地震（焼岳山頂付近の概ね海拔0km以浅が震源と推定される地震）が継続して発生しています。3日14時頃から9日にかけて地震回数が増加しましたが、その後減少しました。

火山性微動は観測されていません。

【山頂付近以外の焼岳周辺の地震活動】

今期間、低調に経過しました。

・噴気など表面現象の状況（図1-1①、図4、図5、図6-1～6-6、図7-①～③、図13）

噴気活動に特段の変化はありません。

北陸地方整備局が設置している焼岳北監視カメラ（焼岳の北北西約4km）、焼岳東監視カメラ（焼岳の東南東約2.5km）及び焼岳南西斜面監視カメラ（焼岳の西南西約2.5km）による観測では、北峰付近の噴気、黒谷火口及び岩坪谷上部の噴気の高さは、いずれも100m以下で経過しています。

14日に岐阜県の協力により実施した上空からの観測では、以前から噴気が認められている岩坪谷噴気孔、北峰南側噴気孔及び隠居穴火口で噴気が認められました。これらの噴気孔を含め、山頂付近の噴気の状況に特段の変化は認められませんでした。

・地殻変動の状況（図1-1④⑤、図2、図8～10）

GNSS連続観測では、山頂付近での緩やかな膨張を示すと考えられる変化が続いています。地震回数の増加に対応して2024年5月末頃からその変化率が増加しましたが、7月下旬から鈍化しています。

傾斜計による観測では、8日に山頂方向の隆起を示すわずかな傾斜変動が認められました。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

次回の火山活動解説資料（令和7年4月分）は令和7年5月12日に発表する予定です。

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、北陸地方整備局、国土地理院、京都大学、名古屋大学、東京大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成しています。

資料の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』『数値地図25000（行政界・海岸線）』『電子地形図（タイル）』を使用しています。

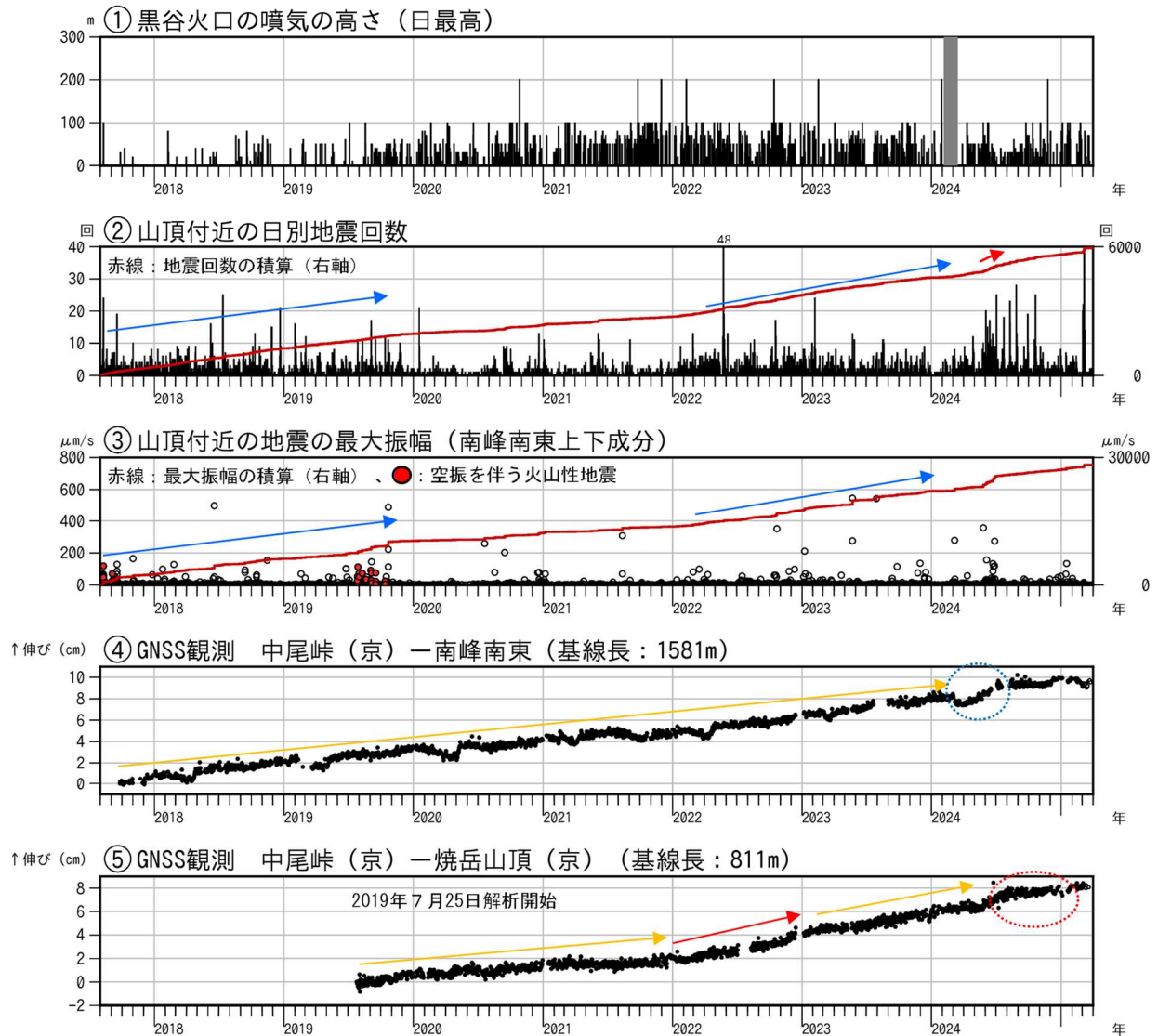


図1-1 焼岳 火山活動経過図（2017年8月1日～2025年3月31日）

山頂付近の地震とは、南峰南東観測点の上下動振幅 $1.0 \mu\text{m/s}$ 以上、S-P 時間 1.0 秒以内で、焼岳山頂付近の概ね海拔 0 km 以浅が震源と推定される地震のことです。山頂付近の地震については、図3も参照。

① 灰色の期間（2024年2月5日～3月14日）は欠測を示します。

④⑤は図9の基線⑥⑧に対応しています。グラフの空白部分は欠測を示します。（京）は京都大学の観測点です。

④の青破線内の変化は、南峰南東観測点の局所的な変動によるものと思われます。

・黒谷火口では、2019年夏頃から噴気を観測する日が増えていきます。

・2022年1月頃から2023年末まで、山頂付近の地震回数に増加傾向がみられましたが、2017年8月から2019年末の期間にみられた地震活動（積算曲線の勾配）とほぼ同程度です（②③青矢印）。また、山頂付近の微小な地震（焼岳山頂付近の概ね海拔 0 km 以浅が震源と推定される地震）が継続しています。2024年5月下旬以降、時々短期的な増加がみられるなど、やや多い状態となっています（②赤矢印）。2025年3月3日から9日にも増加がみられました。

・山頂付近の緩やかな膨張を示すと考えられる変化が継続しています（④⑤橙矢印、赤矢印）。

・⑤の基線では、2022年1月頃から2023年2月頃にかけて焼岳山頂（京）観測点の南東進と隆起による伸びの変化率がやや大きくなりました（赤矢印）。また、山頂付近での緩やかな膨張を示すと考えられる変化は、2024年5月下旬からの地震回数の増加に対応してその変化率が増加しましたが、7月下旬からは鈍化しています（赤破線）。

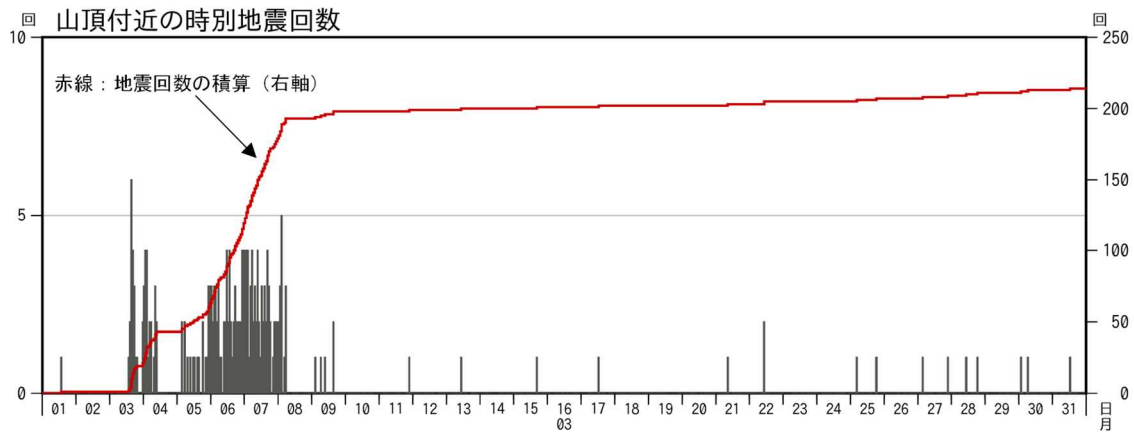


図1-2 焼岳 山頂付近を震源とする地震の時間別回数（2025年3月1日から31日まで）

- ・3日14時頃から9日にかけて山頂付近を震源とする微小な地震が増加しました。

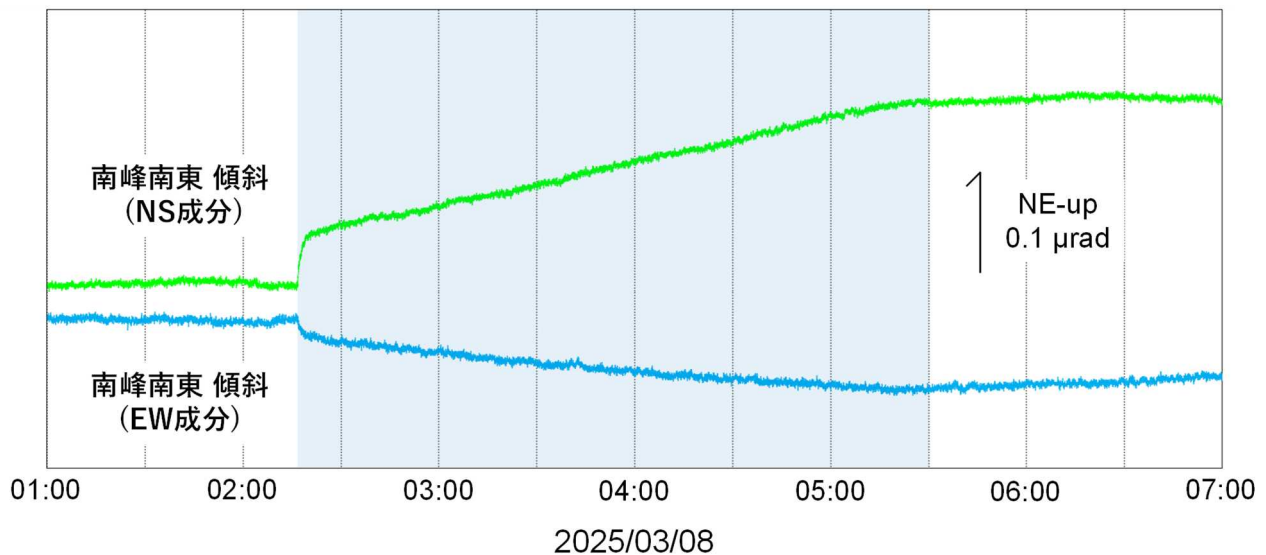


図2 焼岳 8日に観測された傾斜変動（01時00分～07時00分）

- ・8日02時16分頃から05時30分頃にかけて、山頂方向の隆起を示すわずかな傾斜変動が観測されました。南峰南東傾斜観測点で観測された傾斜変動量（青網掛け部分）は、最初の4分間では0.05マイクロラジアン（北上がり）、及び0.02マイクロラジアン（西上がり）、その後の変動量は0.13マイクロラジアン（北上がり）、及び0.04マイクロラジアン（西上がり）でした。

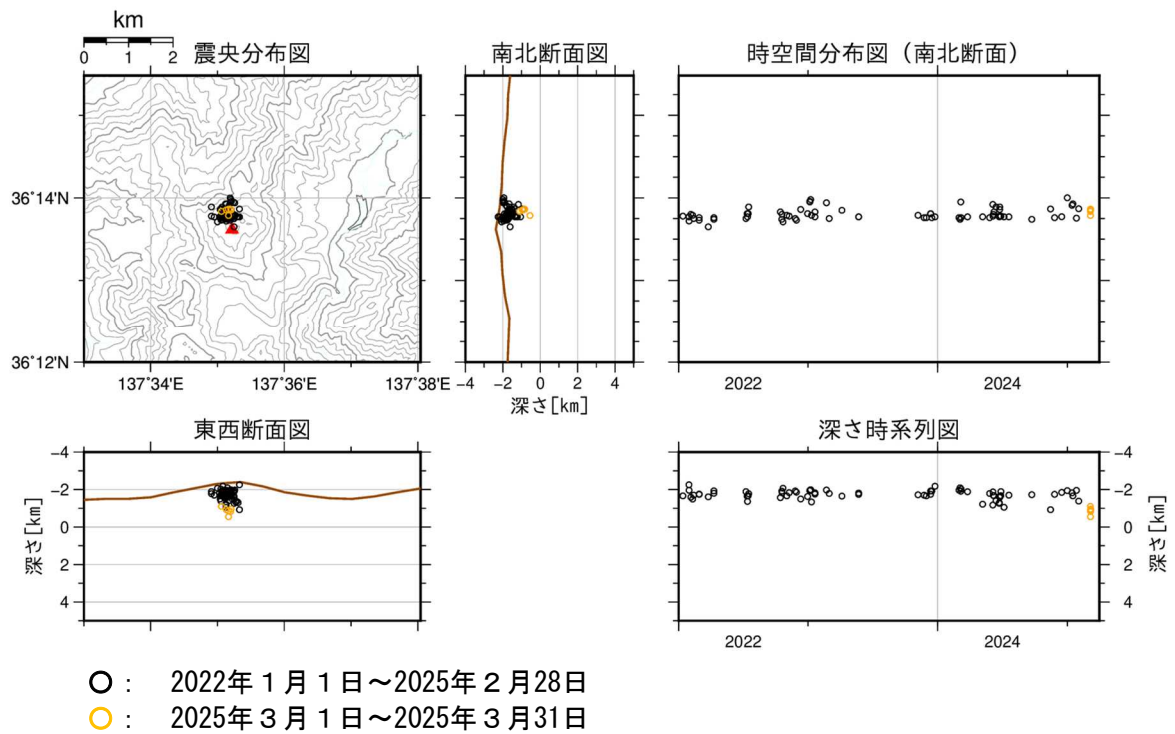


図3 焼岳 山頂付近の地震の震源分布図（2022年1月1日～2025年3月31日）

山頂付近の地震とは、南峰南東観測点の上下動振幅 $1.0\mu\text{m/s}$ 以上、S-P時間1.0秒以内で、焼岳山頂付近の概ね海拔0 km以浅が震源と推定される地震のことです。

- ・震源は、山頂付近の深さ0 km（海拔0 km）以浅に分布しています。



図4 焼岳 山頂部及び南西斜面の状況

（上図：焼岳北監視カメラ、下左図：焼岳南西斜面監視カメラ、下右図：焼岳東監視カメラ）

・噴気活動に特段の変化はありません。

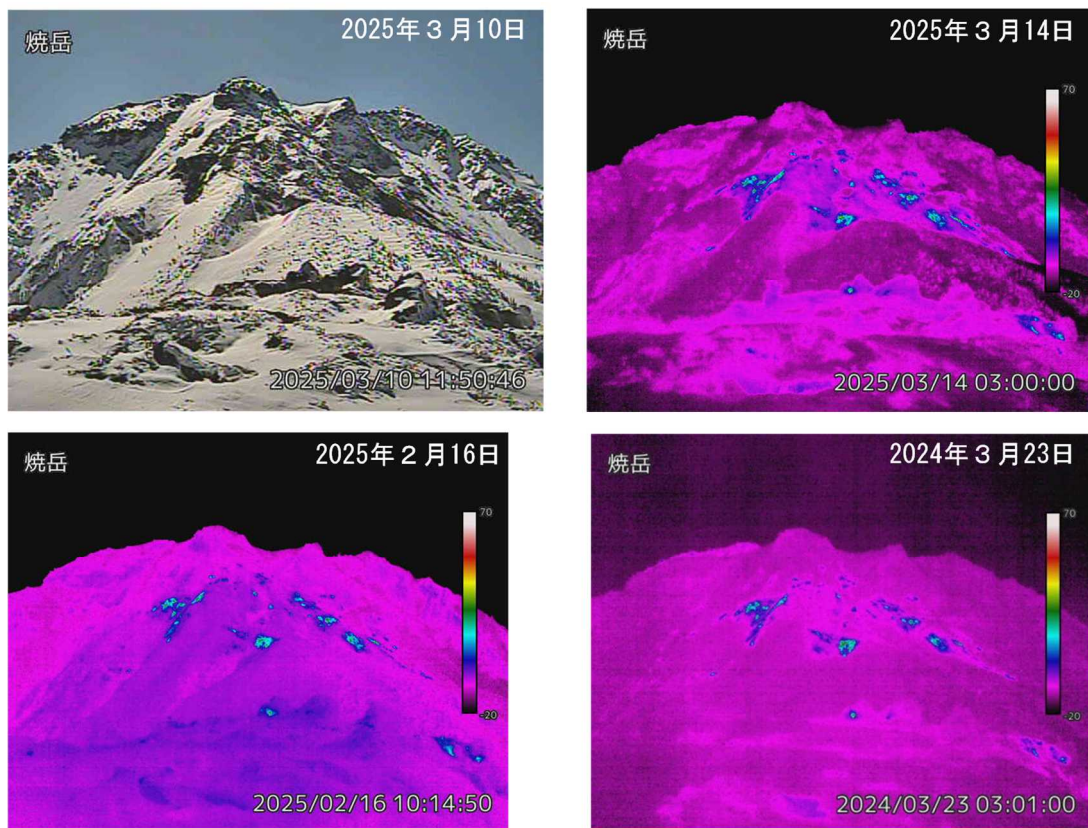


図5 焼岳 中尾峠赤外熱映像カメラによる焼岳の北側斜面の地表面温度分布と可視画像

撮影場所と撮影方向は図13を参照。

・前月（左下図）及び前年（右下図）と比較して、噴気の状態や地表面温度分布に特段の変化はありません。



図6－1 焼岳 北側斜面の状況（3月14日）

- ・ 3月14日に実施した上空からの観測では、明瞭な噴気は認められませんでした。



図6－2 焼岳 東側斜面の状況（3月14日）

- ・ 3月14日に実施した上空からの観測では、北峰東側で明瞭な噴気は認められませんでした。



図6－3 焼岳 黒谷火口の状況（3月14日）

- ・ 3月14日の観測では明瞭な噴気は認められませんでした。



図6－4 焼岳 岩坪谷噴気孔の状況（3月14日）

- ・ 3月14日の観測では噴気が認められました。



図6-5 焼岳 山頂部の状況（3月14日）

- ・3月14日の観測では、北峰南側噴気孔及び隠居穴火口で噴気が認められました。

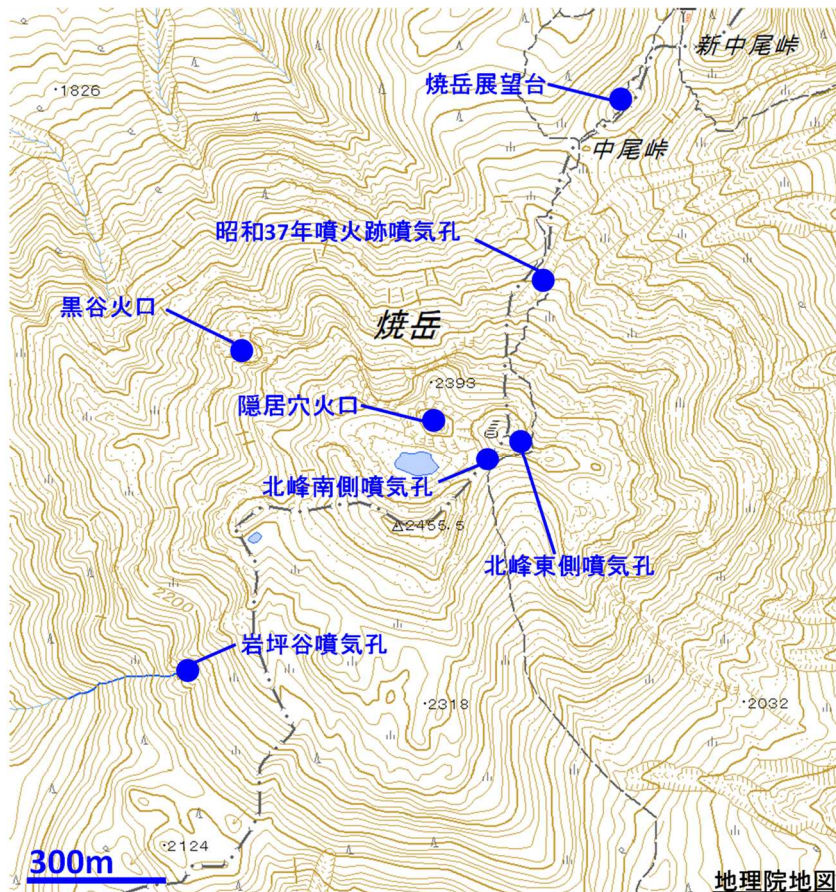


図6-6 焼岳 主な噴気孔・地熱域位置図

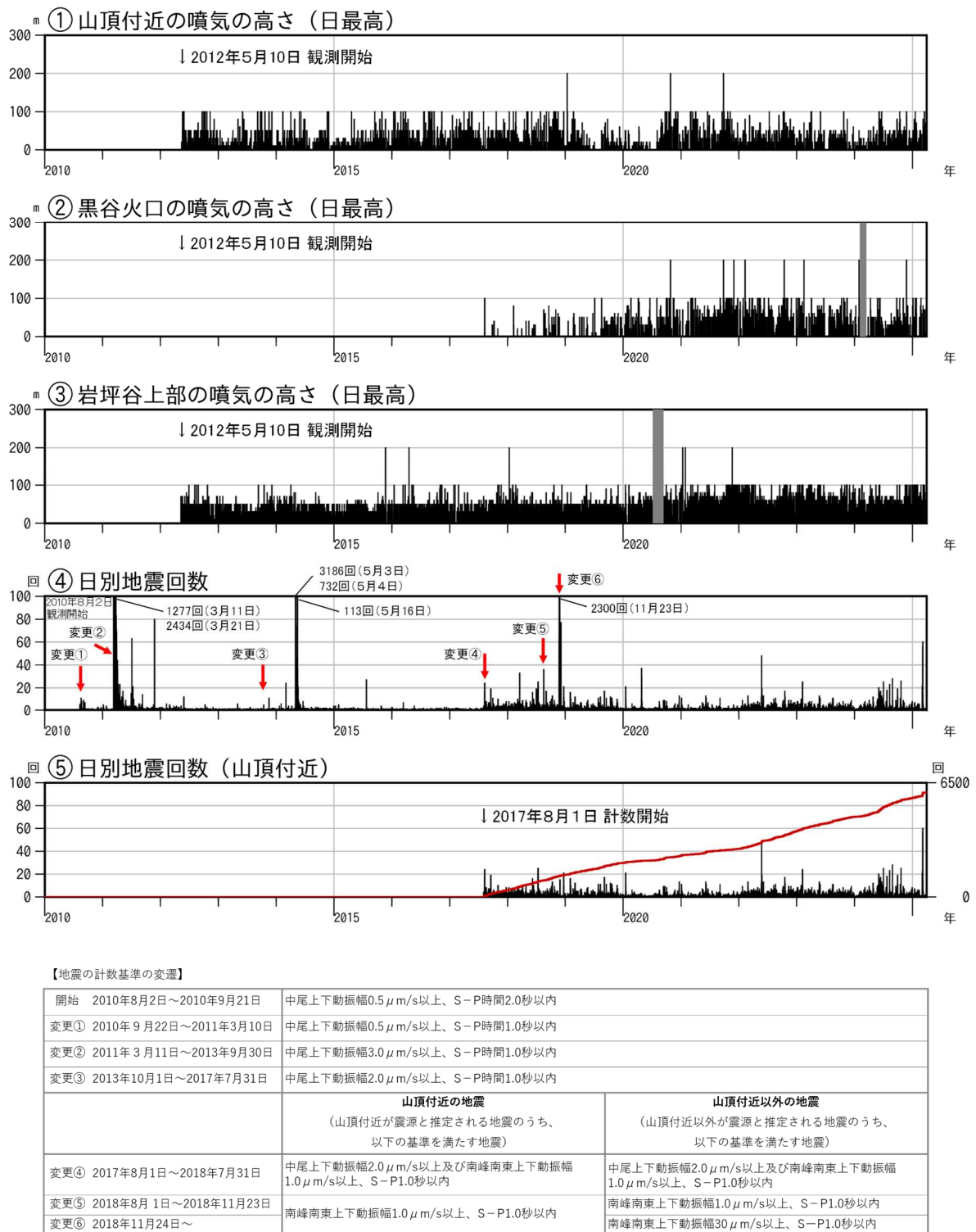


図7 焼岳 噴気の高さと地震回数の推移(2010年8月2日～2025年3月31日)

- ②黒谷火口の噴気の高さは、2024年2月5日から3月14日にかけて、障害のため欠測（灰色の期間）。
- ③岩坪谷上部の噴気の高さは、2020年7月7日から9月10日にかけて、障害のため欠測（灰色の期間）。
- ④2017年8月1日以降、山頂付近の地震と山頂付近以外の地震を分けて計数していますが、④ではこれらを合計した回数を示しています。図中の赤矢印は計数基準の変更を示しています。
- ⑤山頂付近の日別地震回数（左軸）と日別地震回数の積算（右軸）を示しています。
- ・黒谷火口では、2017年夏頃から噴気が時々観測されるようになり、2019年夏頃から噴気を観測する日が増えました。

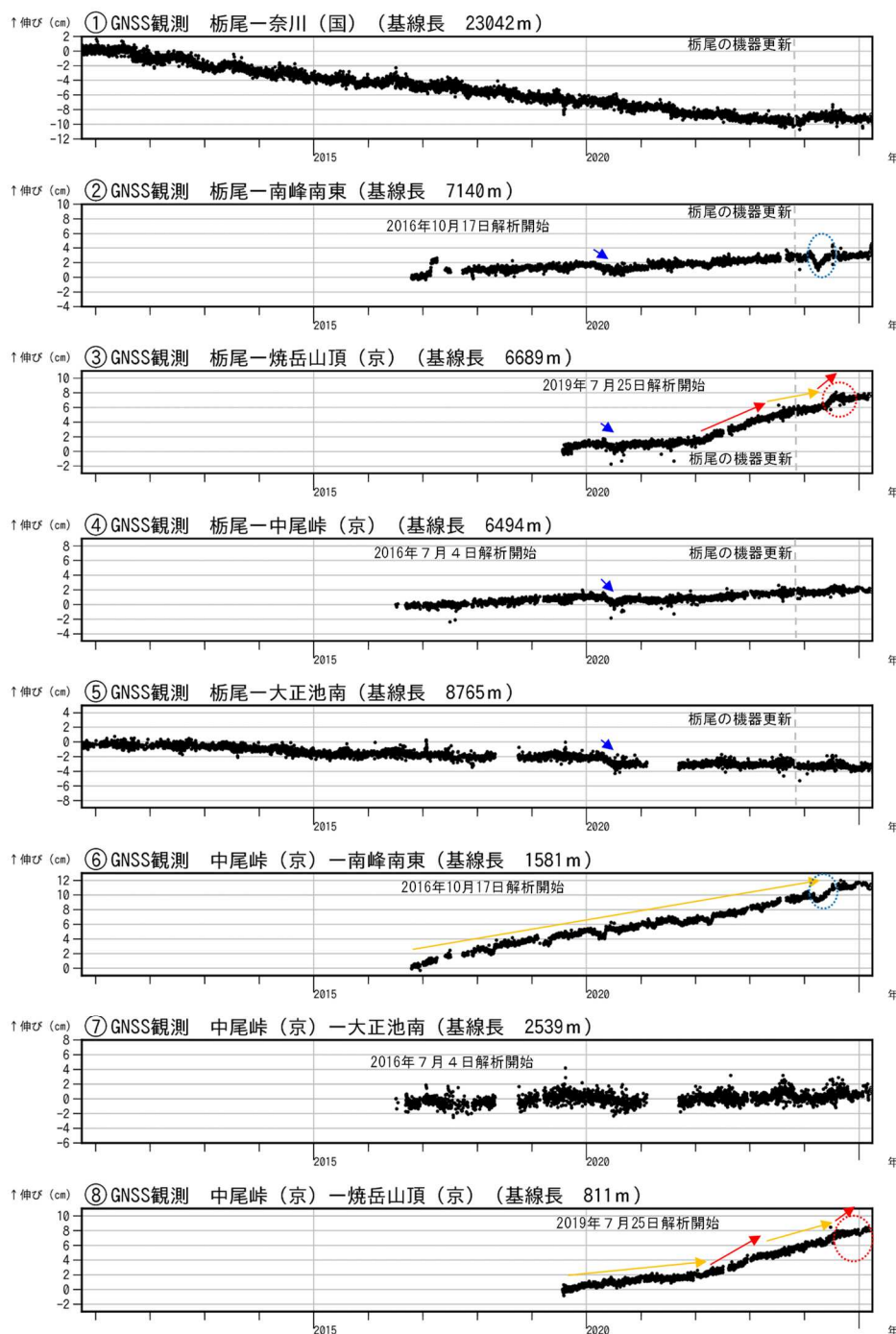


図8 焼岳 GNSS 連続観測による基線長変化 (2010 年 10 月 1 日～2025 年 3 月 31 日)

図9のGNSS基線①～⑧に対応しています。グラフの空白部分は欠測を示します。(国)は国土地理院、(京)は京都大学の観測点です。

2023 年 10 月 17 日の析尾観測点の機器交換に伴うステップ状の変化を補正しています（①～⑤の灰色点線）。

②⑥の青破線内の変化は、南峰南東観測点の局所的な変動によるものと思われます

- ・⑥と⑧の基線では、山頂付近の緩やかな膨張を示すと考えられる変化が継続しています（橙矢印、赤矢印）。
- ・③と⑧の基線では、2022年1月頃から2023年2月頃にかけて焼岳山頂（京）観測点の南東進と隆起による伸びの変化がみられました（赤矢印）。また、山頂付近での緩やかな膨張を示すと考えられる変化は、2024年5月下旬からの地震回数の増加に対応してその変化率が増加しましたが、7月下旬からは鈍化しています（赤矢印、赤破線）。
- ・②～⑤の基線では、2020年5月下旬頃から7月頃にかけて、2020年4月以降活発化した山頂の東～北東側のやや深いところを震源とする地震活動に関連すると考えられる変動がみられました（青矢印）。

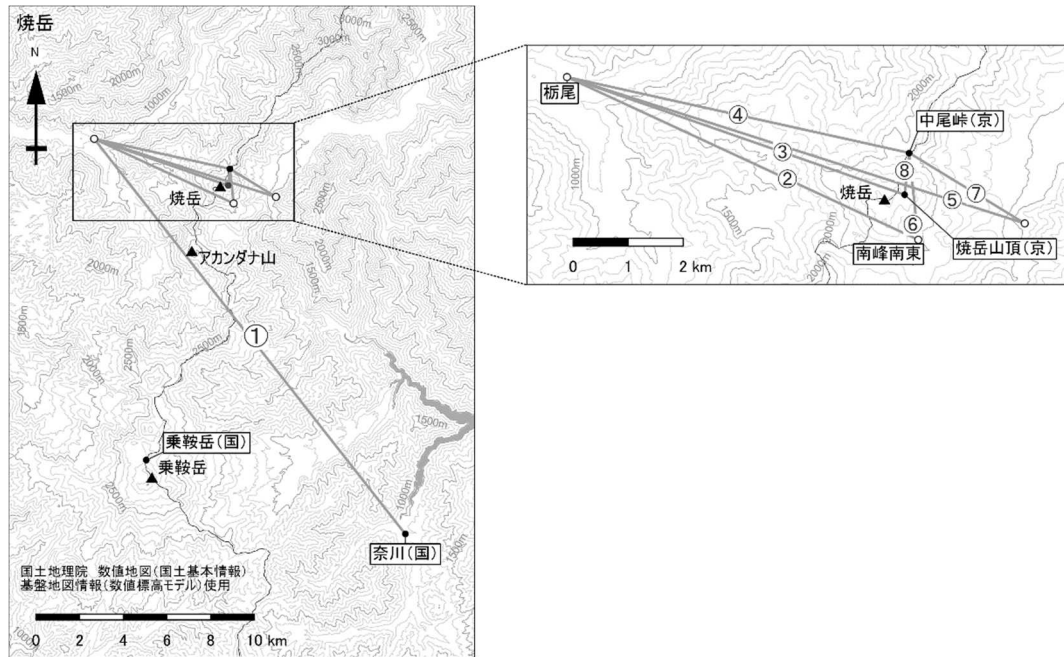


図9 焼岳 GNSS 連続観測点配置

白丸（○）は気象庁、黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

①～⑧は図8のGNSS基線①～⑧に対応しています。⑥⑧は図1-1のGNSS基線④⑤にも対応しています。

（国）：国土地理院、（京）：京都大学

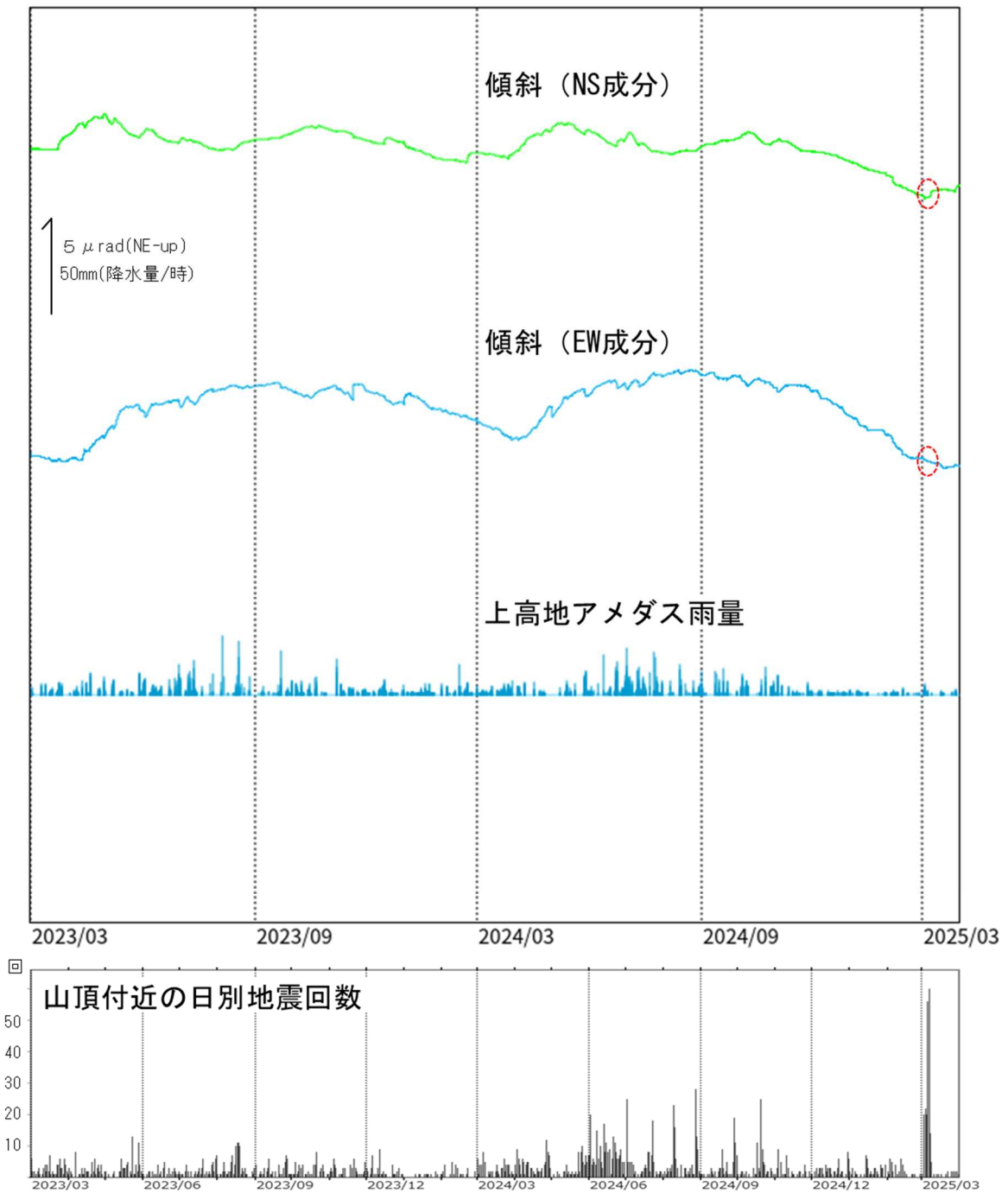


図10 焼岳 南峰南東観測点における傾斜データ（2023年3月1日～2025年3月31日）

- ・傾斜計による観測では、3月8日に発生した山頂方向の隆起を示すわずかな傾斜変動（赤破線、図2参照）以外は、火山活動によるとみられる変動は認められません。

【焼岳周辺の地震活動】

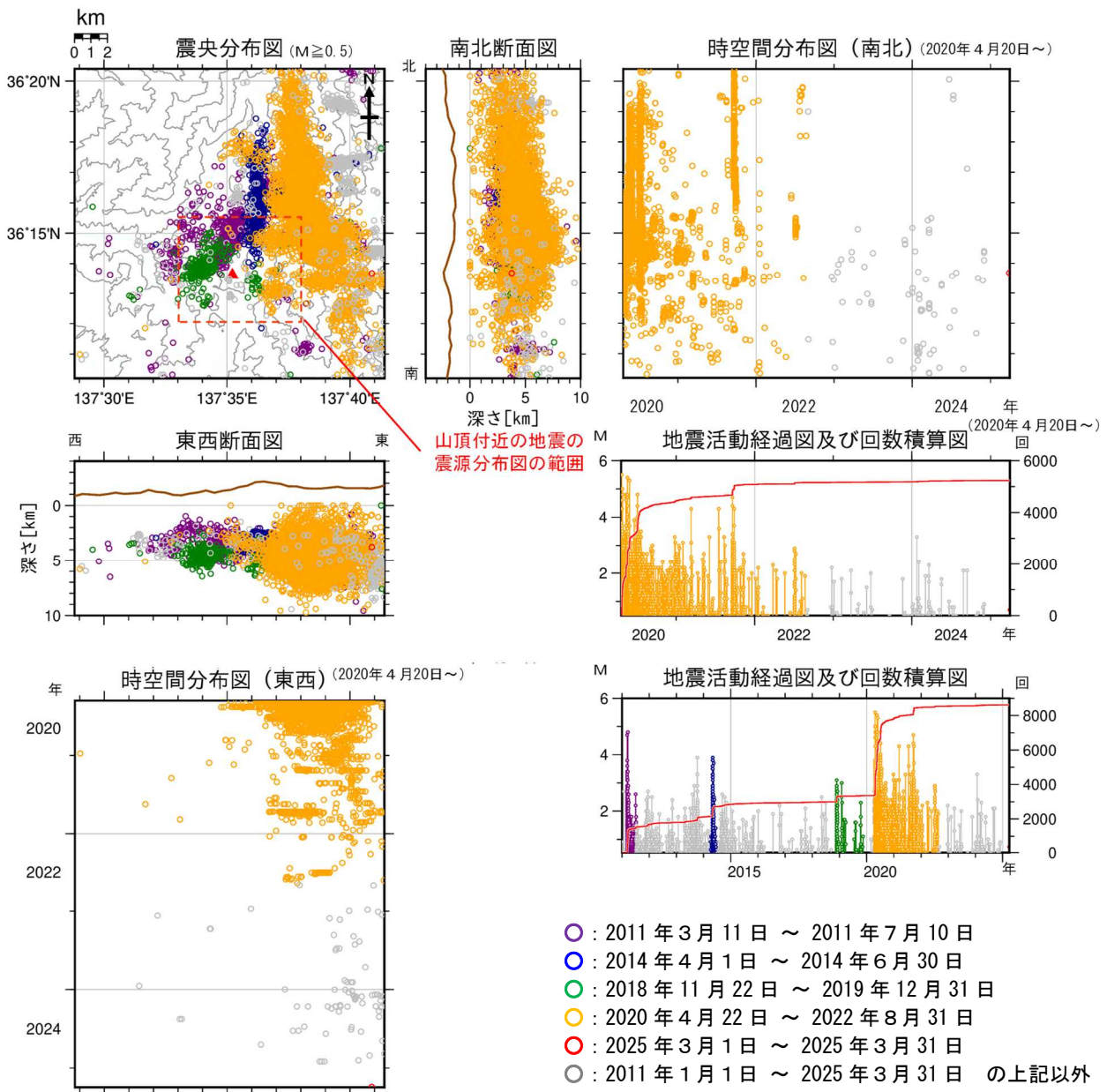


図11 焼岳 広域地震観測網による山体及び周辺の地震活動(2011年1月1日～2025年3月31日)

広域地震観測網により震源決定したもので、深さは全て海面以下として決定しています。なお、2020年9月以降については、地震観測点の標高を考慮する等、震源決定の手法を変更しております。

M（マグニチュード）は地震の規模を表します。

図中の震源要素は一部暫定値が含まれており、後日変更することがあります。

地震活動経過図及び回数積算図の赤線は積算回数を示し、右軸で表されます。

震央分布図中の赤破線領域が、図3で示す領域に

- ・焼岳周辺では、2011 年（紫丸）、2014 年（青丸）、2018 年から 2019 年にかけて（緑丸）、2020 年 4 月から 2022 年 8 月にかけて（橙丸）、地震活動の活発化がみられました。
- ・今期間（赤丸）、震源が求まる焼岳周辺の地震活動は低調に経過しました。

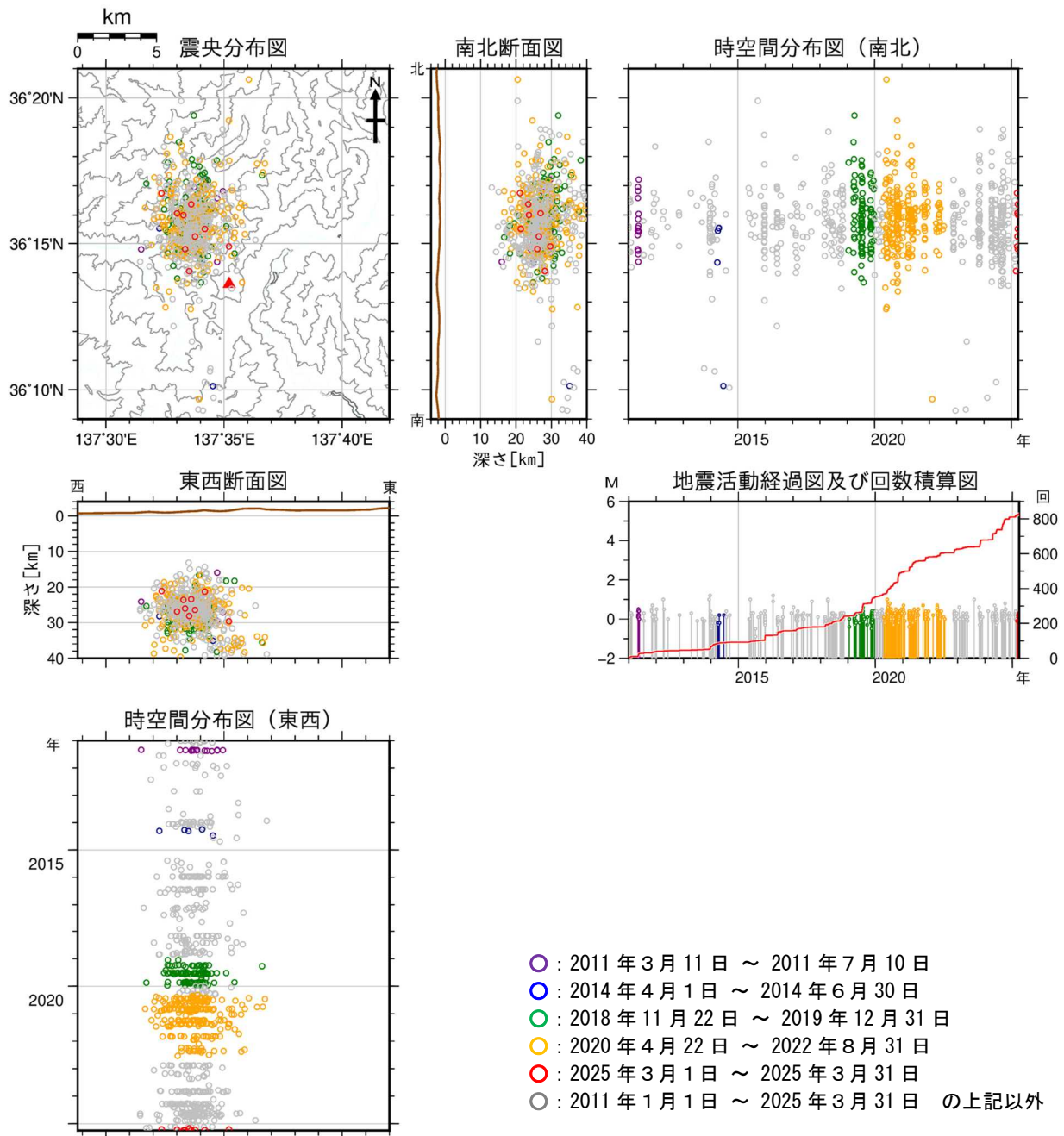


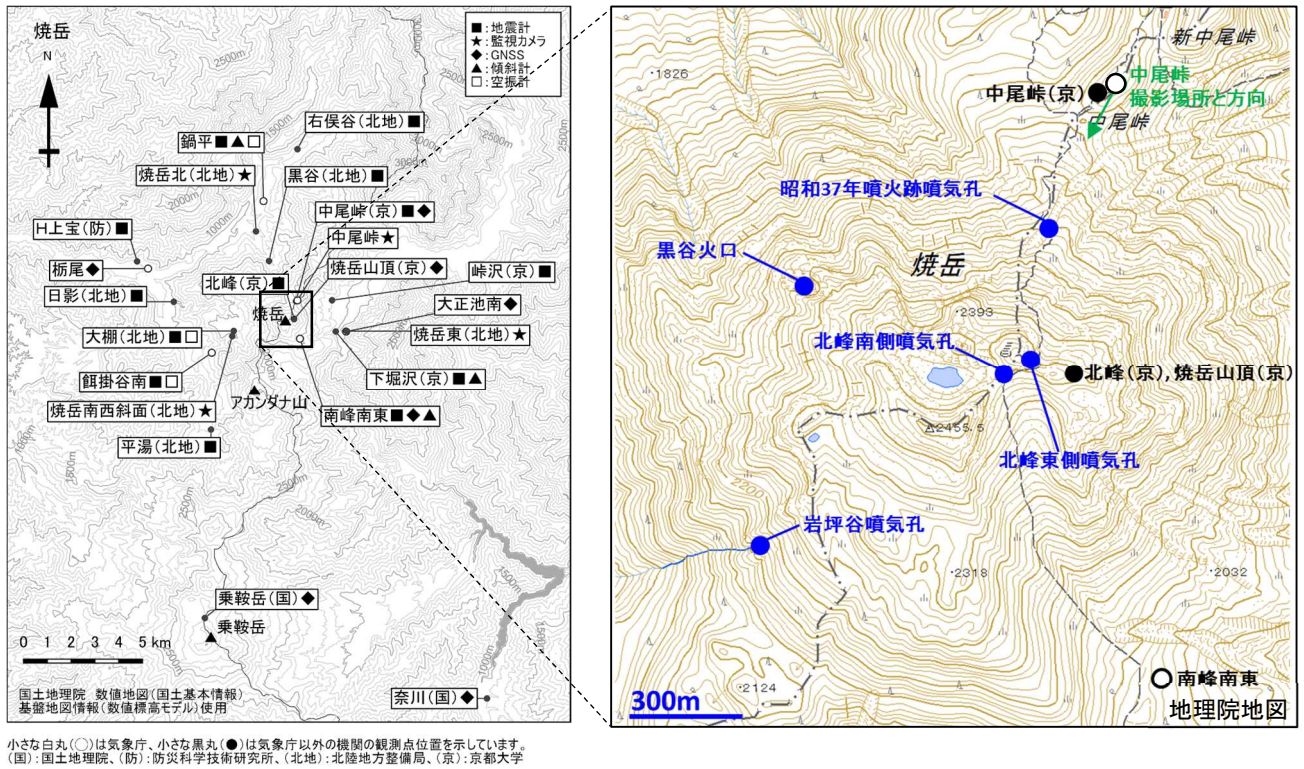
図12 焼岳 広域地震観測網による深部低周波地震の震源分布図（2011年1月1日～2025年3月31日）

広域地震観測網により震源決定したもので、深さは全て海面以下として決定しています。なお、2020年9月以降については、地震観測点の標高を考慮する等、震源決定の手法を変更しております。

M（マグニチュード）は地震の規模を表します。

図中の震源要素は一部暫定値が含まれており、後日変更することがあります。

- ・焼岳の北西側の深い所を震源とする低周波地震の発生状況に特段の変化は見られません。
- ・過去には、図11に示したような焼岳周辺の地震活動の活発化がみられた期間付近で、深部低周波地震が増加したことがあります。



○は気象庁、●は気象庁以外の機関の観測点を示しています。
 (国): 国土地理院、(防): 防災科学技術研究所、(京): 京都大学、(北地): 北陸地方整備局

図 13 焼岳 観測点配置及び噴気孔位置
 右図中の緑矢印は、図 5 の撮影位置と方向を示します。